フィリピン巡礼

「巡礼」は辞書には「信仰によって聖地・霊場を巡拝すること」とある。しかし私にはすべての旅が巡礼のような気がする。

旅は日常生活を外側から見つめ直し、日々をどう生きるべきかを考えさせてくれる。結果として聖なるものに出会い、癒しを得ることが多いからである。

今回のフィリピンへの旅の目的は、学費を支援してきた子どもたちに会うことだった。

妻は昨年二月、脳梗塞になり、四月に退院した。今も週二回、デイ・サービスに通い、一回はリハビリ師が家に来てくれる。

顔の表情、言葉はほとんど以前と変わらないが、左半身にマヒが残り、ツエをつき、左足を引きずるようにゆっくり歩く。

そんな妻を同行すべきか迷ったが、まだ写真でしか見たことのない三人のフィリピンの奨学生のお嬢さんから「待ってます」というメールが届き、同行を決めた。

妻の回復のために祈って下さる現地の神父とシスターたち

サガダのプロテスタント教会で奨学生たちと

旅行中は彼女たちや一緒に行った皆さんに助けられ、健康な時の二人の旅とは違った恵み豊かな旅となった。

人は誰もが老いて弱者となる。強者と弱者の交わり、共生。これからの高齢化社会で自分自身が体験することでもある。

もう一つ、忘れていたものに出会った。出発前、団長の恩地神父から渡された小川哲郎著「北部ルソン戦」である。

今回、ルソン島北部の山岳民族の人たちを訪ねたのだが、この「マニラ―バギオ―ボントック」というルートが、太平洋戦争末期のフィリピンを舞台に日米が戦い、日本軍が敗走したルートとほぼ同じであった。

八カ月間で二十五万人もの死者を出し、今も多くの遺骨が現地に眠ったままであることも知らされた。

日本本土を守るために戦死、病死、餓死した人たちが行間から生々しく伝わってくる。戦争を思い出す巡礼の旅でもあり、過去と今を結ぶものとなった。

デイ・サービスの車が迎えに来ると、思わず「早く!!」と言ってしまう。

「早くできないの」という声を残して車は去る。一人で昼食の用意をしながら、絶望感に近いものを感じる。

しかし、生きることも許されず、餓死し、異国の地に眠るひとたちの行間からの声に叱られる。「何のための旅だったのか」と。

「そうだ!!前を向いて賛美と感謝のうちにきょうを生きよう」と。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

二万四千人の死者が出たバギオの大聖堂